

2008年はレフ・トルストイの生誕180周年。国内でも演劇『闇の力』の上演が企画されるなど、平等や平和や労働の尊さを思考したトルストイの言葉やその生涯に改めて注目が集まっている。昨年、トルストイ夫婦や秘書の日記をもとに、文豪の家族のドラマを追った『トルストイ家の箱舟』を執筆した著者に寄稿いただいた。

特別寄稿

# なぜ今を生きるのか

## トルストイの問いかけと良心の声

ふみ子・デイヴィス

アーティスト、作家

ヤースナヤ・ポリャーナにあるトルストイの家博物館の書斎。トルストイが住んでいた当時のまま、保存されている

写真提供：トルストイの家博物館(71ページも)

### 貴族と農民の共同体と文学

19世紀、ロシアに燦然と輝いた文豪レフ・トルストイは、1910年、秘書として父を支え続けた末娘アレクサンドラだけに告げて、突如として家を出た。トルストイ82歳の晩秋のことである。この家出は死への旅立ちとなり、数日後アスターボヴァという小さな駅の駅長舎で、文豪はその生涯の幕を閉じた。

昨年11月、東京上野の国立博物館で、日口有識者円卓会議なるものが開催され、トルストイの玄孫、ウラジーミル・トルストイも来日して参加した。彼はトルストイの次男、イリヤの曾孫にあたり、ジャーナリストとして活躍したのち、「トルストイの家博物館」の館長に抜擢された。その経緯は、トルストイの家出の謎を追った拙書『トルストイ家の箱舟』（群像社）に詳しく記したが、ウラジーミルに初めて会ったのは、彼に要請されて博物館所属のヤースナヤ・ポリャーナ・ギャラリーで私の陶磁器絵付け展が開催されたこと

きのことである。博物館もギャラリーも、モスクワから南へ200キロのトゥラ市付近にある。

その後も彼とはちよくちよく顔を合わせてはいたが、今回東京で会ったのは2年半ぶりであった。

円卓会議に出席する前、NHKのインタビュアーに同席したときのことだ。「なぜ19世紀ロシアに偉大な文学が出現し集結したのか」という話題に及んだとき、ウラジミールは興味のある見解を述べた。「ロシアのウサージバ(注)が生み出した言語構造や思想が、19世紀に集大成したと思う」と。

ウサージバは貴族の屋敷庭園だけでなく、農園や家畜獵園等も含む。屋敷に仕える保母や婆やはじめ使用人は近くの村や農家出身の者であることから、生活習慣上、階級を越えたつながりが生まれる。そのため、ヨーロッパ各地の貴族たちの生活様式からは著しく隔たった地主貴族文化が生み出された、というのが彼の見解である。

確かにアレクサンドル・プーシキンにはじまり、イワン・ツルゲ

ーネフ等の作品には、ウサージバ形式の集合体で、幼児のころからニヤーニヤ（HЯHЯ）と呼ばれる保母の子守唄や昔話を聞いて育ち、少なからぬ影響を受けた様子が作品を通して窺える。

このウサージバという集合体を通して生み出された思弁や思索は、特にレフ・トルストイの作品によく顕れている。代表作『戦争と平和』（1863～69年）や『アンナ・カレーニナ』（1873～77年）では、貴族階級が主要登場人物を占め、そこに貴族社会における民衆の在り方が交叉して描かれていたのに対して、『懺悔』（1880年）以降はトルストイの宗教思想的転換（ロシア正教会からの離反）を機に、百姓や村人や職人といった貧しい群れが主人公となった。当時のトルストイは、自身で靴職人を見習い、革仕立ての長靴を縫い上げたりしている。

その時代の代表的な作品が民話形式の短編集『トルストイの民話集』（1881～85年）であり、戯曲『闇の力』（1886年）であ

る。『復活』（1889～1900年）の女主人公、カチューシャも、貴族ネフリーウドフに玩ばれた小間使いの娘であった。

ウサージバという貴族と農民との共同体が存在しなければ、トルストイが描こうとする作品のテーマや思想を支える重要な手法のひとつである、階級によって異なる会話を、生き生きと伝えるのは困難だったであろう。

トルストイは、彼の手法として常に百姓や村人の言葉遣いに奥深い良心の声を託して、代弁させ続けたのだ。

### 家出の謎と悪妻説

トルストイの家出が死に繋がったというセンセーショナルなニュースは、世界を駆け巡り、我国でも取沙汰された。その家出の真相究明のため、トルストイの子息たちがヨーロッパやアメリカ各地での講演依頼を受け、次男のイリヤ、つまりヴラジーミルの曾祖父も1917年に渡米した。しかし、同年

に起きたロシア革命という歴史的動向に翻弄されて、祖国に家族を

残したまま、イリヤが再びロシアの地を踏むことはなかった。<sup>注2</sup>そして、トルストイの家出の謎も、妻ソフィアの病癪に疲れ、追い立てられた末という悪妻説に軍配をあげた形でほぼ幕切れとなっていた。

1999年、夫の仕事の関係で20数年ぶりに2度目のモスクワ生活を経験することになった私、もしトルストイの玄孫ナターシャに出会わなかったら、その後何らかの理由でトルストイの家出に興味を抱く機会があったとしても、世間で定着したソフィア夫人悪妻説に特に疑問を持つこともなく、そのまま通り過ぎていたことであろう。しかし、私にとって、偶然では済まされない類のある記憶が焼きついて、心に残っていた。これを説明するには、直感という表現しかない『トルストイ家の箱舟』執筆を機に、以降ずっと感じ続けている。

### トルストイの墓の佇まい

旧ソ連の民族友好大学の予備科生としてモスクワに留学してい

注1 ●ウサージバ（УСАЖИБА）は、ロシアの地主貴族や富豪が所有した田舎の屋敷（付属の建造物や庭、菜園を含む集合体）のこと。ロシア独自の住居形式であるとヴラジーミルは見ている。

注2 ●四女のアレクサンドラは、革命後、講演を目的に来日し、2年近く住んで『お伽の国 日本』という回想記を残した。その後、彼女もアメリカに亡命して兄イリヤと再会し、イリヤの死を見守っている。

ヤースナヤ・ポリャーナはモスクワ近郊に位置する。トルストイは、この地を領地とする伯爵家の四男生まれた





ストルストイの墓に花を捧げる筆者。ヤースナヤ・ポリャーナにて  
写真提供：筆者(72ページも)

私は、強烈なカルチャーショックを受けて動揺し、息も絶え絶えにたたらを踏み、逃亡を計り、ハムレットさながらの生死の問題にまで及んで深刻に悩んだ挙句の果て、「モスクワよさらば!」と思いきや、何のことはない、出国ビザを出してくれないという共産国らしい理不尽な理由ゆえに、その後も長く居残る羽目に陥った。やがて、予備科2年も過ぎれば、休暇をヨーロッパ諸国を旅して過ごすことを覚え、揚々とした留学生活を送るようになっていた。

大学には80数カ国からの留学生が学び、月ごとに各国の「夕べ」が催され、学年末には学部内での学年對抗祭なども開かれた。年々、日本からの留学生の数は減少していき、3年生のころには文学部に在籍する者は私一人となり、もの珍しさがゆえに引っぱり出され、歌わされる羽目になった。ところが、我ら3年生は優勝し、褒美に大きなキエフ風ケーキが贈られ、トゥラ市への一泊旅行という付録までいただいたてしまった。

しかし、これがミソであった。トゥラ市はサモヴァール(ロシアの湯沸かし器)と武器製造で有名な土地であり、前述したようにトルストイの生地、ヤースナ・ポリャーナの近隣の街である。ソ連時代の娯楽施設のない時代に、私たちが優勝組はもの珍しい一団として体良くこの街唯一の劇場に送り込まれた。私も歌わされ、驚くほど大きな花束を頂戴した。翌朝、学生たちは全員でヤースナヤ・ポリャーナの「トルストイの家博物館」を訪れた。ここで私は初めてトルストイの墓に参り、

しがたない声で稼いだ花束を墓の裾に捧げるといふ稀な経験をした。このときの強烈な印象はそれから何十年経っても色褪せることはなかった。この一瞬だけでも永遠を満たすかのような、そんな経験であった。

まわりの木立と草と風の緑のほかは、何ひとつ飾るもののない盛り土の墓は、その簡素さゆえに見事に自然と調和して、精神の光耀を示唆し、トルストイの思想の集結を完璧に表していた。

そして、この全き静寂を前にして、私は呆然として立ちつくし、身動きすることすらできなかった。今でもトルストイの墓の佇まいは一枚の絵となつて、私の脳裏にしっかりと焼きついている。

20歳代の半ばに、これほど完璧な自然との和合に遭遇したことは幸いであつたと思う。それはその後もずっと、私の精神構造における基準となり、原点に近い存在となつた。

### 魂の真の自由を静かに呈示

昨年刊行された『トルストイ家

の箱舟』の執筆には4年の歳月を要してしまつたが、トルストイ夫妻の偏つた不和説を読み解くにつれ、私は常に内在する声を聞いていたような気がする。「それは違う、それは違う……」という小さな声に、墓の光景を通していつも囁きかけられていた。

ソフィア夫人が夫の思想を理解せずに、ヒステリーを起こし続けて責めたてたがゆえの家出という定説は、この墓の佇まいと結びつかないのである。もし夫人が夫の思想を理解せずに、ただのヒステリーで夫を追い立てたとしたら、夫が82歳にして死に繋がる家出をした後の世間からの自分に向けられる非難を晦ますために、夫の遺志など無視して、惨めな死ではなかつたことを強調するべく夫人がごり押ししてゴージャスな墓を建てることだつてきたはずである。

そうしてこそ、立派な世界三大悪妻に数えられて然るべきではなかつたか?

若かつた私が、初めて墓を訪れたときの完璧な自然との調和。透

き通った魂の声が聞こえて来るほどの静寂。そしてそこに潜む、途轍もない哲学と思想の拡がり。

それら全てが色となって、一枚の絵を描きあげていた。これを目のあたりにしたときの魂を掴まれたような衝撃。辺りの草花の優しさや光。そしてそこで憩う虫や小鳥たち。

しかしなぜ、長年にわたってこの一枚の絵が私の記憶に強く生き続けたのか？

それは多分、私がそこに何らかの勝利の証を直感したからではないかと、今にして思う。

そのときのトルストイの墓の佇まいの良さは、30年近く経って再び訪れたときも、いささかの色褪せた翳りも見せずに、ますます柔和な緑と調和していて、妻となり母となった私には、ソフィア夫人の、夫に寄り添えなかつた思いが切なく透けて見えるように感じられた。

この2度目の墓参から執筆に関わり、その過程で、神を愛せるものであると理解したトルストイとロシア正教会との長期にわた

る闘いを知り、宗務院によるロシア正教会からのトルストイ破門（1901年）を知り、深く愛しながらも夫の在り様に踏み込めずに悩んだソフィア夫人の情愴を知った。

そして改めて大理石の塑像も、長たらしい碑文も、ばかどかい黄金の十字架もないトルストイの墓が、何に勝利したのかを知った。

この最小限の物質的表現としての休息の場は、儀式や教理主義の当時の宗教から大きく羽撃いて飛び立ち、魂の真の自由を静かに呈示するという、大勝利を意味しているのである。

この壮烈な戦いにおける、静かな勝利は、これを理解する者にか見えないことを、ソフィア夫人は感じとつていたのであろう。だからこそ、亡き夫の遺志を固く守り、夫が生前選んだ場所に盛り土の墓を築き、自らは家族の墓に納まった。全てを理解できるまで、夫の終焉の領域に入り込んでならぬことを知っていた夫人の在り方は、立派に悪妻説をとり下げている。





『落穂の天使』(一人は天使か)のオヤ  
「何で生きるか」(トリスティア・スタ  
なんでもが翻訳した)のオヤ  
谷知人(トリスティア・スタ)のオヤ  
谷知人(トリスティア・スタ)のオヤ  
谷知人(トリスティア・スタ)のオヤ

### 光明を放つ小さな良心の声

そして今、世界中のいたる所で、人類の暴挙の果てに、自然どころか人々の内に在る小さな良心までもが壊されてゆこうとしている。人々は墓を飾る大理石の彫刻のようなビルを建て続け、自らをくどくどとアピールするために饒舌なメディア向けの碑を彫り続け、心の内なる黄金をむやみに溶かしではばら蒔き、そして着服し続けている。

1881年にトルストイが民話形式を借りて発表した『人は何で生きるか』を、私は『落穂の天使』と題して翻訳し、ナターシャの装

丁と共に今年、未知谷から刊行した。

人に与えられているものとは何か？ 人に与えられていないものは何か？ 人は何で生きるか？

この作品を通して、トルストイは今を生きる私たちにそう問いかけている。

孤独との戦い、国家権力との戦い、戦争と武力全てに反対する戦い、ロシア正教会との戦い。これらの戦いを全て、思考というたつたひとつの武器によって戦い続けたトルストイは、1887年、戯曲『闇の力』を発表した。宗教的解脱を、懺悔によって確立した自らの世界観の全てが、この地味な作品に結実して鋭い光を放っている。

闇には真に力があるのか？ この問いかけを、先述したウサーゾビカから得た、生き生きとした農民たちの言葉を用いて、トルストイは静かに真っ直ぐに投げかけてくる。

2007年12月、ロシアの名門、国立マールイ劇場がユーリイ・ソロミン芸術監督の演出で、25年

ぶりにこの『闇の力』を上演した。ソロミン氏は女優、栗原小巻さんと日ソ合作映画『モスクワー

我が愛』で共演し、故黒澤明監督のアカデミー賞受賞作『デルス・ウザーラ』で主演した名優でもある。

初演に招かれて、私もシンガポールからモスクワに飛んだ。素晴らしい舞台であった。

産経新聞の内藤泰朗モスクワ支局長は、『現代に『光明』』という見出しで、次のようなソロミン芸術監督の言葉を紹介した。

「劇場は、心が疲れ病んだ人たちが癒しを求めてやってくる場所。赤ん坊がゴミ箱に捨てられ、お金のためには何でもやるという現代は、トルストイが『闇の力』を発表した120年前と何も変わっていない。『闇』が力を増すまま、復活させる責任があると感じている」

人を包み、また人の内に必ず潜む神を、良心の声に準え、それをトルストイは百姓のアクム老人に託して描き出した。

アクム老人のしどろもどろし

た、か細い良心の声は、文学界、哲学界、演劇界、報道界と幅広い分野を結束させるに十分な光明を放ち、一人ひとりの在り方をしっかりと照らしてくれるのではないか。

今年、トルストイ生誕180年と2010年の没100年を記念して、『闇の力』日本公演が実現されることを願ってやまない。今を生きるトルストイによって、私たちが生かされ、生きる光を確認したいものである。



福岡県生まれ。1975年、モスクワの民族友好大学(現在のロシア大学)卒業後、モスクワ、香港などで過ごす。シンガポール在住。陶磁器絵付けとロシア伝統芸術の細密画塗りのアーティストとして活躍。Nobby Artギャラリーを主宰・経営

夫のケネス・デイヴィス氏と。ヤースナ・ポリーナウサージバのリンゴ園にて